帝室博物館総長兼図書頭時代の鷗外森林太郎

須田喜代次

はじめに

大正六年十二月二十五日、鷗外森林太郎は帝室博物館総長兼図書頭に任ぜられ高等官一等に叙せられる。大正五年四月十三日の陸軍退官の日から一年八ヵ月余、一度は「今後筆デ立タウ」（大4・12・10、賀古鶴所宛書簡）としていたはずの鷗外に、またあの宮仕えの日々が戻ってきたことになる。そしてそれは、大正十一年七月九日の彼自身の死に到るまで変ることがなかった。

ところで、軍医としての、あるいは医事行政家としての鷗外に対する照射が近年頓に進んできていることに比して、この帝室博物館総長兼図書頭時代の鷗外に関しては、これまで言及されることが極めて少なかったと言っていい。たとえば簡潔にして的をえた渋川驍氏の「森鷗外と図書寮」（『読書春秋』昭30・10）という早い時期のすぐれた仕事以後、新たな視点は呈示されていないのではないか。

それは、この時期に文学者としての鷗外の活動が縮小していくということとも無縁ではないのだろうが、しかし、この時期の彼の生の延長線上に、大正十一年七月六日、死の三日前のあの遺書の存在はあるはずだということ一つを考えてみても、この時期の鷗外を見過ごしてしまうわけにはいくまい。わたくしはかつて、この時期の鷗外の一側面をうかがい知る二、三の資料を紹介したが、[1] 本稿でも、いくつかの資料に依りながら帝室博物館総長兼図書頭時代の鷗外を追い、前述したようなことを考えるための足掛かりを提示してみたい。

I

鷗外日記によれば、彼のもとに任官の報が入ったのは、大正六年の十二月二十三日だったようだ（「宮内次官報任官之事」）。しかし前日の二十二日には早くも次のような記事が『時事新報』紙上にスクープされている。

○鷗外博士
▽博物館長に
後任との噂は無根
——博士夫人否定す——

多年帝室博物館長として美術界に貢献する所甚大なりし男爵股野琢氏が今回辞意の念深く、その▽▽隠退の後を受けて、医学博士文学博士森林太郎氏が館長たるべしとの噂坊間に伝えられ居れるも、股野男は「那様事一向関知せず、素より余に辞意毫頭ある無く、依然其職にあるものを、後任として森博士推挙さるゝ理由あるべからず、」と否認し、又森博士方では夫人▽▽博士に代りて「宅が博物館長になる等とは曾て聞いたこともありませぬ、屹度

それは何かの間違ひでムいませう」とて全然この噂を否定し去りぬ

この記事は、この時から二年数か月前、大正四年九月陸軍「勇退の噂」が流れた時、「東京諸新聞の記者」を前に語った森陸軍省医務局長の談話を彷彿とさせる。あの建前と本音とが交錯する世界に、こうして鷗外は戻ってきたわけだ。

十二月二十五日午前十時、宮内省において正式に辞令を受け取った鷗外は、翌二十六日博物館並びに図書寮に初めて赴き、帰途前任者股野琢を訪問、「坐談寝久」に及んだ。そしてこの年の暮も押し詰まった十二月三十日、彼は賀古鶴所に宛てた書簡の中に次のような歌一首を詠み込んでいる。

老ぬれと馬に鞭うち千里をも走らむとおもふ年立ちにけり

「馬に鞭うち」疾駆するイメージは、たとえば『うた日記』の最末尾に置かれた詩「過現未」等にも登場する、鷗外のよく使うイメージのひとつだが、新しい年を前にした鷗外の心の昂ぶりを見ておいていいだろう。

Ⅱ

森総長誕生直後の十二月二十六日、波多野敬直宮内大臣の次のような談話が残されている。

「…森博士が博物館総長に新任されたに就ては今後出来るだけ時代の進運に伴ふべき施設改善が行はれるであらうと考へる」(『東京朝日新聞』大6・12・26)

こうした波多野大臣の期待に添うかのように、森新総長は就任早々、早速精力的な動きを見せることになるのだが、その一端を、まず当時の新聞記事によって押さえてみる。

●森総長が就任匆々
博物館の改革
◇相変らず軍服姿で
◇早出晩退の執務振
——正平版の論語飜刻計画

「森さんは学者よりも事務家だ」といふ噂は最近博物館の役人さん達の間に囁されて新帝室博物館総長森林太郎氏は甚だしく恐い小父さん扱ひにされて居る博士が三宅坂の陸軍省を退いてから軍服はお払ひ箱と思ひきや「事務は是に限る」と許り又候▲無風流にも金地に二つ釦の肩章厳めしく例の長剣をがちやつかせて宮内省の図書寮と博物館とへ交る〻毎日早出晩退の精励恪勤、遺に抜けぬ軍隊気質、一分の遅刻も無く総長室に納まり神谷博物館主事を督励して「あの帳簿を」「この書類を」と万端抜目なく、列品目録と首っ引しては館内を隈無く取調べて居るつい二三日前には年に指折る程しか明けぬ三年町の▲博物館倉庫の奥深く入って大分虫に喰はれて腐朽した正平版の論語板木を掘出し「そりやあ日本に一つだ、珍品がある、宝の持腐れぢや早速飜刻出版しよう」と、あれや是やと小半日も探し廻った、何さま件の板木は後村上帝の正平年間、今を距る五百七十年前の物であるが、追って梓に上せられるさうである、斯かる学者的方面の半面には館内役人共の職務振りにも注意し▲専心館務に力を致させるやう自ら率先して事に当るといふ風なので役人諸氏は恰もライオンの前に跼蹐した態である、館員中には何でも片手間に会社や何々会や二股主義の人もあるとかで呑気に見えて実は頗る忙しい館務に全力を注ぐには従って一方をやめなければならぬので中には既に内職を抛棄したものもある、之を要するに新総長は着任匆々未完の儘の目録完成、列品の整理等寸分の余裕なく遺憾なく精力主義を発揮し着々改革の歩を進めて居るといふことである(『東京朝日新聞』大7・1・14)

間違なく右の朝日新聞記事に触発されて書いたと思われるのが、森潤三郎著『鷗外森林太郎』に既にいち早く紹介されている、高島米峯[2]

の「新任博物館総長森林太郎博士に与へて博物館の革新を促す」（『中央公論』大7・2）なる一文だ。[3] この文章において高島は、「博物館の革新」のためのいくつかの提案をしているが、要するに彼は新総長が「博物館に対して、情弊廓清の大斧鉞」を下すことを期待していたわけなのだった。[4] が、「…上野モ三年町モ活気ヲ生ゼシメ度ト日々奔走仕居候」（大7・1・24、賀古宛書簡）という決意のもとに動き始めた鷗外は、高島に言われるまでもなく、「情弊廓清の大斧鉞」を実行に移している。「…当方又々官吏と相成今回は一時全く筆硯廃絶の覚悟に御座候」（大7・1・23、永井荷風宛書簡）というよく知られている「覚悟」は、こうした彼の決意のもとに発せられたものであったことを確認しておきたい。

さて書簡等によって見る限り、彼がまず手をつけようとしたのは、人員のことであったようだ。「…博物館人員ナカ〳〵動シ難ク機ノ到ルヲ待ツ外無御坐候」（大7・4・5、長井行宛書簡）という就任直後の言が残っている。さらに「関屋次官言汰冗員事」という大正十年九月二十六日の「日記」中の記述に接すると、このことは鷗外在任中の一貫した課題であったと言えようか。

そして目に見える形での「改革」として早速実施したのが、博物館の陳列替であった。

それまで博物館は明治以来のしきたりで品目種類による分類陳列をしていたのを、先生は大正七年からこれを改めて、歴史的時代別による陳列配置の方針を立てられ、ここに博物館が画期的な脱皮をして近代が始つた。（秋山光夫「博物館総長時代」『文芸』昭37・8）

しかし、実はこの陳列替にかかる費用の捻出にしてからが、大問題であったようだ。

拝啓博物館繰越金一万五千円ヲ陳列替ニ使用之件追加予算トシテ提出イタシ候処内蔵寮（内蔵頭ハ山崎氏）ノ意見トシテムズカシキ模様ニ相見エ候其論ハ陳列替ノ必要ト否トハ問題外ナリ（略）要スルニ事物ノ動カヌ場所柄ト申外無之候…（大7・6・25、賀古宛書簡）

山本九郎右衛門（「護持院原の敵討」）ではないが、「大きい車は廻りが遅いのう」という鷗外の嘆きが聞こえてきそうな文面だ。しかし鷗外はあきらめることなく積極的に当局と折衝をして行く。そして「…ト次官申サレ候即チ大ブ折レテ来ラレ候シカシマダナカ〳〵困難ト被存候」（大7・7・11、賀古宛書簡）という経緯を経て、結局「…此ヨリ博物館之陳列替ニトリカヽリ可申候」（大7・8・6、賀古宛書簡）というところまで漕ぎ付けてしまうのである。

こうして博物館総長兼図書頭として精力的に始動する鷗外の動きを見ていくと、わたくしにはそれが、陸軍省医務局長就任直後の彼の姿にだぶって見えてくる。[5] たとえば、明治四十一年十二月十四日付『報知新聞』が報じていた森新医務局長の姿を想起しておいてもいい。ここには先に引用した、新博物館総長の動向を伝える『東京朝日新聞』の記事に通じるものがあるのではあるまいか。

△医学博士として文学大家としての鷗外氏の盛名は古いが事務家としての辣腕は医務局長となつて初めて顕はれた氏が同局に入つて長となるや局内の宿弊を一掃し無遠慮の改革を施し老朽を淘汰し俊秀を抜擢し大に局の面目を一新したがこれも山県公の後楯があるからである然し部内の古顔連には生意気だと云はれ大分反対があるやうだ

（「森鷗外と文芸院（文壇の一問題）」）

かつて重松泰雄氏は、「陸軍軍医団規則」や『軍医団雑誌』への鷗外の関わりをも考慮に入れつつ、そこに彼の「軍医界の「澄清」に賭ける夢」を指摘したが（「軍医森鷗外小考―医務局長就任時の動静について―」『国語と国文学』昭47・4、『日本文学研究資料叢書　森鷗外Ⅱ』〈有精堂〉所収）、その「「澄清」に賭ける夢」は、新博物館総長兼図書頭としての鷗外のものでもあったと言っていいだろう。

Ⅲ

その森陸軍省医務局長は、かつて就任直後に次のような演説を残している。

学会は学術を研究するところである、学術を研究するには事物を知ることを目的とする、それを知て何の用に立つかといふことを顧るを要せない、此意味から学術の自由といふものが成立つ、学術の自由を制限したり又は干渉とか圧制とかいふ手段を以て傷けるときは学術は真の発展を為すことは出来ない、…

（「陸軍軍医学会総会に於ける演説」『陸軍軍医学会雑誌』明41・5）

こうした「学術」に対する姿勢は、やはりこれも森新博物館総長兼図書頭に踏襲されていったものであった。先の朝日新聞記事中にあった「学者的方面」を次に見ていってみよう。

日本考古学を専門とされる山口大学人文学部助教授中村友博氏が、一九九一年三月十六日に島根県立八雲立つ風土記の丘資料館で開催された「風土記の丘友の会」主催の講演会において、「森鷗外と日本考古学」と題する講演をしている。[6] その講演の中で、氏は、次のような注目すべき指摘をしている。

以上ざっと『鷗外全集』をさらってみましたけれども、追加をしておきたいことがあります。とくに『鷗外全集』ではもれている記事ですので、ご存じでない方も多いのではないかと思うわけです。まず「「万葉集」に表われたる寧楽（なら）時代の風俗」と題する長い論文が『風俗研究』という雑誌にあるようですが、こちらはまだ私読んでいません。『考古学雑誌』に短いものですが、2回鷗外は記事を載せています。

中村氏は、こうして『鷗外全集』未収録文の存在を指摘している。氏の指摘に触発されて、わたくしも早速当該誌に当ってみた。

まず氏がまだ読んでいないという『風俗研究』掲載文についてであるが、結論から言うと、これは鷗外文ではなかった。『風俗研究』誌は、大正五年三月に創刊されており、当の「「万葉集」に表われたる…」という論文はその創刊号から掲載されているのだが（以下数号にわたって連載）、実はこれは「森林太郎」のものではなく、当時第三高等学校の教授であった「林森太郎」のものであった。したがってこのことに関するかぎり、氏の指摘は誤りということになる。が、もう一つの方、すなわち『考古学雑誌』掲載文は、氏の指摘どおりまぎれもなく、鷗外のものであった。しかも氏が指摘されるとおり、『鷗外全集』未収録のものでもある。さらに当面のわたくしの関心に即して言えば、これらの鷗外の発言はまさに博物館総長兼図書頭時代のものであり、この時期の彼の一側面を伺わせる、貴重な資料ということになる。

※　※

氏が明らかにされたそれは、一つが、『考古学雑誌』第八巻第十号（大7・6・5発行）掲載の「烏八臼の解釈」、そしてもう一つが、同じく『考古学雑誌』の第九巻第一号（大・7・9・5発行）に載った「烏八臼の事」なる一文なのである。

そもそも「烏八臼」（ウハツキュウ）とは何か。

実はこれも中村氏が先の講演中において手際よくまとめているので、ここでわたくしが繰り返すことはないのだが、講演記録というものの性質上それを入手しにくいということもありそうなので、簡単に氏の二番煎じをしておくことにしたい。

ことは、鷗外文が掲載される二号前の『考古学雑誌』第八巻第八号（大7・4・5発行）に掲載された、清水東四郎なる人物の「烏八臼に就きて」という文章に始まる。その中で清水は、福島・仙台方面で「墓所の石碑に法名などを記した上部に」［烏］と［八］と［臼］を組合せた文字、すなわち［鴿］という文字があるが、その意義は如何、と問題を提起したのであった。

…烏八臼を碑額に用ゐるのは何の意なるか結局不明である。然し

唯今迄左思右考揣摩臆測を逞しくして研究し得た愚案を発表して世の先学者の教へを請ふと同時に、先輩の意見をも茲に発表して同好者の判断を願ふ次第である。

そしてこの清水文にいち早く応じてみせたのが、他ならぬ鷗外であったわけなのだ。(中村氏は講演という制約もあってか、鷗外文そのものは引用紹介されていない。したがって以下、その鷗外文全文を引用しておくことにする。)

○烏八臼の解釈　先々月本誌上に烏八臼の研究が清水東四郎氏によつて発表せられたが其意義は結局不明といふことになつて居る。この解釈につき一寸気付いた点があるから茲に発表して置きたいと思ふ。

通志昆虫草木略に鷦鳩は烏鶻ともいふとある。即ち左の如く説明して居る。

鷦鳩、爾雅曰、鵧鷦、郭云、小黒鳥、鳴自呼、江東名為二烏鶻一、

按此似二鶴鴿一、無レ冠而長尾、多在二山寺厨檻間一、今謂二之烏鶻一、

次に本章綱目を見ると此鳥について更に左の如くある。

鷦鳩、一曰鵰頰、訛作二批頰鳥一、羅願曰、即祝鳩也、江東謂二之烏臼一、又曰二鴉鶻一、小二于烏一能逐レ烏、云々。

即ち此の説明によって鷦鳩即ち烏鶻は烏よりも小さいがよく烏を逐ふ鳥であることが判る。而して此鳥の学名は Dicrurus Cathoecus Swinh. といふのであるが此学名を与へたスインホウ氏は親しく支那に来て支那の禽類を研究した学者である。此学名によつて此科に属する鳥類の一般性を調べて見ても猛鳥の性質を有し烏を逐ふに適して居ることが特筆せられて居る。これによつて考へて見ると鴿なる一字は烏鶻より変化したものと思はる。さて此鳥の名を墓標に刻するに至た動機は供物等に近づく烏を逐ひ払ふ考へから起つたものと思はれる。最後に此風俗が支那より伝来したものであるか又は我国にて創められたものであるか此の点については未だ文献を調査するの余裕を持たぬことは遺憾である。

(医学博士、文学博士森林太郎氏口述)

最後に「口述」とあるように、もともとこれは鷗外が「口述」したものを、誰かが筆記したものであったようだ。その誰かとは、誰か。それはおそらくは、当時博物館学芸員として鷗外の下にあり、かつ本『考古学雑誌』の評議員をやっており、さらには個人的にも鷗外と親しかったはずの高橋健自であったに違いないとわたくしは考える。仮にその推測が正しいとすれば、高橋健自という導き手を介してとはいえ、鷗外はこうして考古学という全く畑違いの分野にまで、その知的好奇心のアンテナを向けているのである。

ところで、この「烏八臼」問題は、さらに尾を引くことになる。先の鷗外文が掲載された翌月から二ヵ月に渡って、山中笑という人物が、「烏八臼の諸説を聞て」(『考古学雑誌』第八巻第十一号、大7・7・5)および「烏八臼諸説の追加」(『考古学雑誌』第八巻第十二号、大7・8・5)なる文章を発表、この問題に関する自説を展開した。そしてその山中説を受けて、翌九月(第九巻第一号)、鷗外は再び同誌に発言を寄せる。それが、二つ目の文章「烏八臼の事」に他ならない。

○烏八臼の事　烏八臼を林葬の遺風とし、鳥に屍をついばましむとの説は、在俗男女を葬る墓には不相応なるが如し。檀林皇后の故事は頗る疑はし。之に反して鴉を鴉等を逐ふ鳥なりとする時は、国史にも典拠あり。聖徳太子伝暦太子の墓の條に、「天皇勅大臣、置守墓戸十烟、葬送之後、外国百姓、遠来廻墓、相聚叫哭、日夕不絶、五十日後漸有減耗、有一異鳥、形如鵲、其色白、常住墓上、烏鳶到即追去、時人名為守墓鳥」とある「守墓鳥」是なり。要するに烏八臼問題は未だ確拠を得ざる者なり、学者の考究を待たざるべからず。(医、文学博士森林太郎氏)

「口述」とないところをみると、今度は鷗外は自ら筆を取ったのだろうか。右の文章の冒頭部の「檀林皇后の故事」にからめたのが、山中説の骨子であったわけなのだが、見たように、鷗外はそれに対して、反対の立場を表明している。しかし性急に結論を出そうというの

ではなく、自らの分を越えることなく、「要するに烏八臼問題は未だ確拠を得ざる者なり、学者の考究を待たざるべからず」として、問題の解明自体は専門の学者の考究に委ねている。そうした彼の学問に対する真摯なそして謙虚な姿勢が、かつて「恰もライオンの前に跼蹐した態」と報ぜられた博物館員の人たちとの人間関係をも好転させていったようである。

初めはこわい上官のように思つていた職員たちも、先生の変らぬ温顔に接してうれしくなり、毎月二回、土曜日の午後集まることにし、先生から親しくお話をききたいとお願いしたところ、早速承諾されたうえに、先生の発案で、池田芦洲さんから「尚書正義」の講義、逸見仲三郎さんから「小倉百人一首」の講義をきき、その後を茶話会とすることになつた。このふたりはいずれも編修課に勤めていた隠れた老学者であるが、先生は世間的でない

このような学者を心から尊敬しておられた。(秋山光夫、前掲文)

この秋山文が述べる勉強会そのものは、大正十年から始まった「有成会」を指すのだと思われるが、先に見た鷗外の学問に対する姿勢が、いわばこうした〈座〉を、生み出すに力あったのではなかろうか。

『考古学雑誌』には以後わたくしの調べた範囲では、鷗外の発言を見出すことは出来ない。しかしはからずも中村氏によって指摘された二つの文章によって、博物館総長就任時の鷗外の、幅広い知的関心といわば学問的情熱とでも言うべきものを確認することができたように思う。

こうして事務的方面にも、また学者的方面にも、鷗外はいきいきとした活動ぶりを示していく。

Ⅳ

陸軍医務局長、中央衛生会委員、日本薬局方調査会委員、臨時脚気調査委員、美術審査委員、教化用図書審査委員、etc、従四位、勲二等、功三級、医学博士、文学博士、千朶山房観潮楼帰休庵各主人、鷗外漁史、森林太郎君を紹介する—さう大勢を一時に紹介されても覚えきれない—と云つたッて夫れで一人なのだから仕方がない。

(「東人西人」『大阪朝日新聞』明43・2・2)

かつて医務局長時代の鷗外は、右の記事にあるような、さまざまな肩書きを負わされた人物であったわけなのだが、この博物館総長兼図書頭に就任した鷗外を待っていたのも、やはり同じような状況であったようだ。

その一つとして、大正八年九月の帝国美術院長就任がある。

大正八年九月六日の官報において帝国美術院規程は発表されたわけなのだが、同時に人々の関心は誰が美術院長になるかということにあったらしい。当時の新聞によると、鷗外の他に、黒田清輝や徳川頼倫らの名が候補者として取り沙汰されている。そうした中にあっての鷗外の美術院長就任は少なからず意外なものとして受け止められていたようだ。その辺の事情について、時の文部大臣中橋徳五郎の次のような談話が残されている。

森林太郎博士の帝国美術院長には世間何れも意外を感じ居れるが右は中橋文相が自ら選べるものにて博士は当然之を受くべし而して博士を院長に選べる理由は(略)其院長たるべき人は美術、文芸、音楽等の総ゆる芸術に知識を有し閲歴声望共に高き人たらざるべからず又仮令単に美術のみの府と見るにしても帝国美術院は兎に角帝国の美術を代表する所なれば今後外国より知名の士又は芸術家観賞家等◇来朝の場合も進んで之を導き◇我が美術の真面目を示し同時に大いに語りて研究する所もなかるべからず、其場合外国語を解し芸術を解する人格ある院長なければ不都合にて夫には此場合適任者として森博士以外になしといふ所より同博士を選べるものなりと

(『東京日日新聞』大8・9・6)

当代における鷗外という存在に対する評価の一端をうかがい知るこ

とができそうだ。続いて『東京日日新聞』は、翌々八日の正式の就任（「是日任帝国美術院長」大8・9・8、「日記」）を待って、九日の紙上に森帝国美術院長の談話を載せている。これも全集未収録であるので、以下やや長くなるが煩を厭わずその全文を引用しておきたい。

帝国美術院長
鷗外博士語る
文相とは面識がない
今度は次官が主として扱つた
院長としては語る抱負がない

帝国美術院長に為つた森鷗外博士を上野の帝室博物館に訪ふ、博士は例の軍服姿で快く記者を迎へて断片的に語る「美術院に対する中橋文相の抱負は却々大きいやうだが美術院の事は南次官が主として尽力されたので私は未だ文相に会はないから◇文相の口からは何の話も承はらない、実はまだ一面識も無いのだ正木校長も尠からず骨を折られたやうだ、院長としての抱負について話すことは何も無いが一個の理想はあつても実現は困難だからね……文相もいろ〳〵改革刷新の実を挙げられて結構なことだ」と美術院の話はこれで終つて今度◇飛行機で日本へ来るダヌンチオの話に移る「ダヌンチオは新聞の材料になるやうなことをよくやる人だ文学者としては抒情詩人で戯曲は余りよくない此人の成功したのは古代近世現代等有ゆる時代の言葉を混用して旨く調和させたことである日本では◇各時代語の混用を駄目だといふ人が多いがダヌンチオは兎に角成功してゐるのだ四五年前見た写真ではもう頭が禿てゐたから近頃は大分ひどくなつたらう」と文芸談は最後に徳川時代の武鑑に移り話題は滾々としてつきなかつた

美術院長としての発言としては、当たり障りのないもので、むしろそっけないくらいのものだが、談が文芸談に及んで、彼がおそらくは一貫して関心を持ち続けていた文学者であるはずのダヌンチオの話題が出ていることは興味深い。(8)

実は記事中にもあるように、この時期ダヌンチオが飛行機で来日するという情報が新聞紙上を賑わしていた。「東道役」として当時ナポリの東洋語学校教授（『時事新報』大8・9・4記事による）であった下位春吉の名が写真入りで紹介されたり、イタリア大使館の歓迎準備の様子が報ぜられたり、この計画はかなり具体的に進んでいたようだ。「我が文壇」は何をすべきかということで、「歓迎する意味での文学講演会」の開催を提案し、その歓迎委員長は「鷗外博士が適任」とする、いささか気の早い内田魯庵の談話も、これを『東京朝日新聞』紙上（大8・9・10）に見出すことができる。

結局この企ては、「ダヌンチオ氏の日本飛行は強制的に中止」（『東京日日新聞』大8・9・27）ということで水泡に帰してしまうわけなのだが、もし来日が実現したとすれば、先の中橋文相の発言に照らし合わせても、二人の会見が実現した可能性は大きいと言えようか。

とまれそうした〈妄想〉はさておくとしても、ここで鷗外が、ダヌンチオの文学者としての真価を抒情詩の分野に見、特に日本では認められがたい各時代語の混用にその成功の因を求めているという点には注意をしておきたい。もちろんたったこれだけの発言に、あまり大きな意味付けをしてしまうことの弊は慎まなければならないが、たとえばここに同時期の「本文中文芸ニテ大ナル作者トナルハ可ナリト記シ候ヘドモ作者トシテ立派ニ為シ遂グルヿハ日本社会ノ制裁ガ認容セズ従而是亦殆不可能ト被存候」（大8・6・5、山田珠樹宛書簡）という発言を合わせ鏡として置いてみるならば、そこにこの時期の鷗外の日本という文学土壌に対する何らかの〈見切り〉を、指摘することができるようにも思うのだ。

さてこうしてスタートした帝国美術院だったが、実は文部省が選定した十五名の会員のうち、横山大観、下村観山の二名が会員たることを拒絶するという波乱含みの出発になってしまったのだった。特に横山大観は、四年前に上梓した『雁』に口絵を寄せるなど、鷗外とも浅からぬ因縁のある人物であっただけに、鷗外の心中複雑なものがあっ

たのではあるまいか。就任一月後（大8・10・15）、彼は賀古鶴所に宛てて、こう書き送っている。

……頃日美術院サワギニテ甚忙シク只今マデ挨拶延引イタシ候

「甚忙シク」の裏には、そうした事情もあったに違いない。しかし同時にこの手紙には、「帝謚考百五十枚バカリトウ〳〵脱稿」したことが告げられてもいるのだ。鷗外の精力的な活動ぶりは、少しも衰えていない。

V

陸軍退官以後の鷗外の発言を追っていくと、彼がしばしば自らの「老」に言及していることに気づかされる。博物館総長兼図書頭就任時の賀古宛書簡に認められた歌についてはすでに触れたが、他にもいずれも周知の一節だが、「老は漸く身に迫つて来る」（「なかじきり」『斯論』大6・9）であるとか、「機会はわたくしに此の書を公にせしめた。書中の収むる所は皆訳文である。わたくしは老いた」（「「蛙」はしがき」『蛙』大8・5）というように。

なるほど鷗外日記を繰っていくと、山田弘倫が伝える陸軍省医務局長時代の彼とは違って（『軍医森鷗外』〈文松堂書店〉）、この時期の鷗外は、かなり頻繁に病のために、それも長期にわたる欠勤を余儀なくされており、肉体的な老が彼に迫ってきている様を確認することはできる。しかし、見てきたような鷗外の活動ぶりを見るかぎり、自身ロにする「老」とは裏腹な、むしろ精神的な「若さ」をこそ彼の内に確認することができるように思われる。

死の前年になった大正十年六月、臨時国語調査会会長に就任すれば、「国語調査会大難事ニテ苦心仕候所詮ダメラシケレド行クトコロマデ行ッテ処決シタシト存候」（大10・7・12、賀古宛書簡）と彼は書く。それは決して名前だけの会長就任ではない。

また家では、「社会問題ハ其後モ大ニ研究イタシ居候」（大9・1・24、賀古宛書簡）「其後社会問題ヤラ普通選挙ヤラ色〻大イニ研究イタシ候」（大9・2・10、賀古宛書簡）として、やがて最晩年の「古い手帳から」に結晶していくのであろうような勉強を怠らない。大正九年三月六日「午後往富士前小学校。為警察官。講社会問題」（「日記」）とあるのは、日頃の勉強の成果の一端を披露したのだろうか。[9] 翌大正十年二月十四日には「夜往第一高等学校食堂。為生徒談話」（「日記」）している。昼間の仕事を終えて（この日は月曜日、したがって彼は博物館の方に「参館」している）、夜わざわざ出かけて行って、若い人たちに、何を鷗外は語りかけたのだろうか。

かつて鷗外は「文明人ハ野蛮人ヨリ活動大ナリ是レ精神上ノ活動ナリ」と書き、「人ノ価値ハ活動ノ分量ト方向トニ従ヒテ定マル方向正シキハ殊ニ必要ナリ何ノ職業ニテモ可ナリ勤勉ハ活動ナリ懶惰ハ不活動ナリ」（傍点等原文「自彊不息」）[10] と書いたのだったが、こうした彼の活動ぶりは、「自彊不息」という言葉がまさに当てはまるのではあるまいか。[11]

そんな鷗外のこの時期の常磐会詠草の歌を一首、最後に見ておきたい。

この常磐会詠草に関しては、すでに坂本秀次氏の詳細な報告がある（「たづぞの」からみた常磐会」『鷗外』26号、昭55・1）。特に氏は雑誌『たづぞの』を調査することによって、『常磐会詠草』第五編（大6・12刊、百三十回までの詠草選歌を収録）以後の未刊の部分の詠草（大6・7〜大11・2）の実態を明らかにしたのだった。それによれば、この百三十一回目以降の常磐会――それはまさに鷗外の帝室博物館総長兼図書頭時代に重なるわけだが――における鷗外の入選歌は、たった一首であることがわかる。ただ氏はその歌がどういうものであるかは紹介されていない。が、実は『たづぞの』とは別のルートから、今回その歌に巡り合うことができた。すなわち『婦女新聞』（ちょっと意外の感もするのだが）が、やはり百三十一回以降の「常磐会詠草」を掲載していたのである。問題の鷗外歌は、『婦女新聞』第一千七十二

号（大9・12・5発行）に掲載された常磐会第百七十一回選歌に次選歌として見えるもので、それは次のようなものである。

孫

幼児のおほぢとよぶにともすれば忘るゝ老をおもひいでつゝ

この歌そのものは、『鷗外全集』（岩波書店）に「己未・庚申存稿」として収められているもので（表記は一部異なってはいるものの）新出の資料というわけではない。が、「常磐会詠草」入選歌を別立にしている全集の方針に従えば、本来これは「常磐会詠草」の部分にこそあってしかるべきものということにはなろう。(12)

それはともかくとして、入選しないかぎり記録として残ってこないから、この四年半程の間に開かれた五十五回の歌会（そのすべてに鷗外が参加していたわけではないけれども）で、たった一首の入選歌というのは偶然のようなものだが、しかしはからずもこの歌には、題詠とはいえ、当時の鷗外の一面をのぞき見ることができるように思われる。というのも、「幼児」によって「忘るゝ老」を思い起こされるような状況が、この頃の鷗外の周りにあったからなのである。もちろんこの歌を実体験にそのまま重ねて考える必要は毛頭ないのだが、少なくも鷗外をしてそうした〈想い〉に誘う要素だけは指摘できそうだ。すなわち、前年（大8・8・6）の真章（於菟長男）の誕生、そしてこの年（大9）十一月三日に生まれたばかりの爾（茉莉長男）の存在がそれである。

そうした新しい生命を前にした時、普段は忘れている自身の「老」があらためて意識にのぼる。逆に言えば、それほど普段は「老」を意識することなく、活動しているということになるだろう。そしてそれこそ、この時期の鷗外の活動ぶりに重ねるにふさわしい〈想い〉だ。

かつて石川淳は、鷗外の「我百首」の試みに対して、「詩人の不断の若さ」を指摘したが（『森鷗外』）、今そのことにならえば、この帝室博物館総長兼図書頭時代の鷗外森林太郎にも、その「不断の若さ」を指摘しておいてよいのではあるまいか。

注

1 「鷗外の仏文」（『日本近代文学』第36集、昭62・5）。「「鷗外博士談片」をめぐって―大正九年の鷗外―」（『大妻国文』第十八号、昭62・3）

2 高島米峯は一八七五（明治八）年生まれ、一九四九（昭和二十四）年没。著述家、仏教運動家。東洋大学学長も務めた。

3 本文中に「新館長森博士、就任以来、軍服を着し軍刀を帯し、早出後退、万事軍隊式を発揮することをこれ怠らず、兎角、遅刻早退に馴れたる館員をして、大に覚醒せしむることありたりと聞く。紀律を正すも亦是れ有用の事、決して軽視すべきにあらずと雖も、此くの如きは、必ずしも、新旧館長更迭の意義にあらざるべし」という部分があり、これは朝日記事を念頭に置いたものと思われる。なお、本文末尾には「（大正七年一月十八日）」という執筆年月日が記されている。すなわち、朝日記事の四日後ということになる。

4 上野に博物館、三年町に図書寮があった。鷗外は、月水金は博物館に「参館」、火木土は図書寮に「参寮」していた。

5 陸軍省医務局長就任時の鷗外に関しては、拙稿「陸軍軍医総監・陸軍省医務局長森林太郎の周辺―鷗外「豊熟の時代」の一側面」（『文教大学国文』第十号、昭56・3）、「陸軍制度のうちの鷗外―軍医総監時代―」（『一冊の講座　森鷗外』〈有精堂〉所収）において、若干の考察を試みた。

6 講演記録集が、「森鷗外と日本考古学」と題して、一九九一年六月に「島根県立八雲立つ風土記の丘」から発行されている。この講演集の存在は、本学教授服部旦氏にご教示いただいた。記して謝意を表します。

7 大正八年十一月十一日、妻しげ子に宛てた書簡において、鷗外は同月二十七日に予定されていた長女茉莉の結婚披露宴に招待する人々の「人選」について相談している。その中で「日常親しくする人」として名が挙げられている人たちの一人に、高橋健自がいる。また鷗外日記を見てみても、高橋が勤務以外に鷗外宅をしばしば訪問していることを確かめることができる。

8 たとえば、明治四十二年三月から大正二年十二月まで五十五回にわたって『スバル』に連載された（途中三回休載）「椋鳥通信」において、ダヌンチオは、トルスイトの七十五回、ハウプトマンの七十三回、ヴェーデキントの五十回に次いで四番めに多い四十三回取り上げられている。

9 この時の警察官に対しての話の内容も、そして次の第一高等学校での生徒に向けての「談話」の内容も、現在のところわたくしは確認し得ていない。

10 『鷗外全集』後記によれば、「半紙七枚に細い毛筆で書いたもので表紙もつけず覗世撚で綴ぢてある。恐らく大正四、五年 1915／6 頃の筆で父が親戚又は知人の女に与えたものらしく思はれる」とある。

11 小堀桂一郎氏に次のような指摘がある。

「鷗外の晩年はそのたえざる自彊不息（自ら彊めて息まず）の精神的緊張の故に、決して功成り名遂げた人の安らかさに似たものを持たなかったのである。」（『森鷗外―文業解題　創作篇』〈岩波書店〉）

12 ついでに言えば、全集で同じように「己未・庚申存稿」「辛酉存稿」として載せられている歌に付せられている詞書を、常磐会での兼題と比べてみると、重なるものがあるので、それらの歌のいくつかは、常磐会のために作られた歌であると思われる。